

Title	漢詩人河上肇の旧蔵書 - 京大河上文庫訪書記 - (河上 肇生誕100年記念号)
Author(s)	一海, 知義
Citation	經濟論叢 (1979), 124(5-6): 287-308
Issue Date	1979-11
URL	<a href="http://dx.doi.org/10.14989/133797">http://dx.doi.org/10.14989/133797</a>
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

# 經濟論叢

第 124 卷 第 5・6 号

河上 肇生誕 100 年記念号

---

福田徳三と河上 肇	杉 原 四 郎	1
初期河上における經濟政策論	大 野 英 二	21
河上 肇の「国家論」小考	住 谷 一 彦	50
漢詩人河上 肇の旧蔵書	一 海 知 義	65
河上 肇と「加算と減算」	高 寺 貞 男	87
『改版社会問題管見』序文	山 之 内 靖	99
財政問題よりみた河上 肇「貧乏物語」	池 上 惇	104
河上 肇における科学と宗教と哲学	古 田 光	120
資 料		
京都大学時代の河上 肇	細 川 元 雄	141

經 済 学 会 記 事

經濟論叢 第123卷・第124卷 総目録

---

昭和 54 年 11・12 月

京 都 大 學 經 濟 學 會

## 漢詩人河上 肇の旧蔵書

——京大河上文庫訪書記——

一 海 知 義

一昨年の夏以来、河上肇博士の旧蔵書類を収める京都大学経済学部河上文庫を幾度か訪れ、そのつどいろいろと収穫があった。といっても、経済学者河上肇は私にとって理解の外にあり、興味をひかれるのは詩人河上肇、とりわけ漢詩人河上肇である。訪書の対象も、主としてその分野の旧蔵書に限られる。

ただし、次のようなこともあった。何気なく手にした旧蔵書の1つ Lenin: Die Diktatur des Proletariats und der Renegat K. Kautsky (Leipzig, 1919) の巻末に、次のような河上さん自筆の短歌2首がしるされていたのである。

牛乳を煮ながら歌を作りけり病後の旅の宵のつれづれ

牛乳を煮ながら歌を考へる出養生ぞきの宵のつれづれ

この2首、『河上肇著作集』第11巻(詩歌集, 1965年筑摩書房)にも、『河上肇詩集』(1966年筑摩書房・筑摩叢書)にも、収められていない。未見の河上作品(詩・短歌・俳句・漢詩)を搜集しつつある私にとっては、思いがけぬ発見であった。2首には日付がなく、「大正九年一月坪井九八郎君恵」とあるレーニンの書にしるされていることや、「出養生ぞきの」といったことばから制作年代の推定を試みるのも、なかなか楽しい作業であった。

河上さんには一種メモ魔の性癖があって、さまざまな書物にさまざまな識語をしるし、書きこみをする。多くは散文だが、ときに古人の詩句をしるし、また自作の詩歌を書きつけることがある。上記レーニンの書はその一例だが、またたとえば、旧蔵書の1つゴリキイ『文学論』(大竹博吉訳, 1936年ナウカ社)のタイトルページ裏に貼られた小さな色紙に、

白雲深処是吾郷 昭和十一年十月河上肇書

と墨書してあるのは、宋の蘇東坡の七言律詩「白塔鋪歇馬」の末句である。「昭和十一年（1936年）十月」とあるから、獄中においてこの書を読み、この詩句を書きつけたのであろう。『獄中日記』（岩波書店）によれば、ゴリキイ『文学論』は獄中における愛読の書であった。

またたとえば、Chamberlain: Die Grundlagen des neunzehnten Jahrhunderts (München, 1912) 第二分冊の中扉に、

ロンドンの榮華の巷にたたずみてふくろふの鳴く故郷を恋ふ 大正三年九月二十二日ロンドンにて

とあるのは、河上さん自作の短歌である。「大正三年（1914年）ロンドンにて」というごとく、イギリス留学中の作、のちに『祖国を顧みて』（1915年実業之日本社）の中扉にしるされた題歌、

ロンドンの繁華の巷にたたずみてふくろふの啼くふるさとを恋ふ  
の未定稿であろう。

以上2, 3の例から見ても、詩歌の人河上肇を知りつくすためには、既刊の『河上肇詩集』を読むだけでなく、未公刊の書簡・ノート類に目を通すのはもちろんのこと、旧蔵書の（それも和書・漢籍・洋書の別なく）すべてのページを繰らなくてはならない。私の訪書の主たる対象は漢籍だったが、結局は河上文庫が架蔵するすべての旧蔵書、さらにノートや草稿類にまで目を通すこととなった。そしていろいろと思わぬ収穫があった。しかしそれらのことについては別に稿をおこすこととし、ここでは漢詩人河上肇の旧蔵書、すなわち河上文庫にある漢籍や中国文学関係の和書に限って紹介し、若丁の感想と意見をしるして訪書記としたい。

河上さんが漢詩に親しむのは晩年であるが、その晩年にも幾度か転居等のことあり、旧蔵書の散佚したものもすくなくないであろう。したがって、河上文庫架蔵本が漢詩人河上肇旧蔵書の全容を示すわけではない。しかし晩年の日記に見える購書記録等をも参看することによって、その輪廓はほぼうかがえるだ

ろう。

なお、今春、この文庫の目録が京大経済学部から刊行された。書きこみや識語等についてもその有無をしるすだけでなく、必要と認めたものは転写した詳細な目録であり、利用者に多大の便宜を提供する。小文執筆に際しても被益すくなくならず、ここに誌して謝意を表したい。

(一)

河上文庫が梁蔵する中国文学（主として詩）関係の旧蔵書は、大きく2つに分類することができる。その1つは、漢詩創作のための直接の手引き、いわゆる漢詩作法の書物であり、いま1つは、中国の詩人のアンソロジー（漢籍と和書）およびその研究書である。前者の数がすくなく、後者が圧倒的に多いことはいうまでもない。

まず、前者すなわち漢詩作法に関する旧蔵書をあげてみよう。それは全部で10点ある。購入年月が記入してあるのは、次の3点である。

1. 作詩資料及語彙上巻 仁賀保香城・土屋竹雨編 昭和11（1936） アトリエ社 （1938.1.15購入）
2. 新編漢詩自由 松崎覚本 昭和9（1934） 日比谷出版 （1938.2.1購入）
3. 平仄新字典 高田集蔵 昭和13（1938） 厚生閣 （1939.9購入）

購入日の書き入れはないが、日記（『晩年の生活記録』、1958年第一書林）の購書記録によってその日がわかるのは、次の3点である。

4. 漢詩作法 草堂詩閣著 昭和8（1933） 巧人社 （1938.1.14購入）
5. 作詩法講話 森槐南 明治44（1911） 文会堂 （1938.2.1購入）
6. 応用聯語粹編 莊俞 民国25（1936） 上海商務印書館 （1942.8.5購入）

購入日不明のものに、次の4点がある。

7. 詩語対句自在 藤良国 嘉永5（1852） 江戸須原屋茂兵衛

8. 詩韻集成 1・2 余照春亭 刊年未詳
9. 詩韻精英 1・2 池田観 明治13 (1880) 大阪柳原喜兵衛
10. 新修平仄字典 林古溪 昭和16 (1941) 明治書院

以上が、漢詩作法に関する旧蔵書のすべてであるが、晩年の日記にはこのほか次の購書記録がある。

松崎天胤『漢詩自在』 (1938. 2. 1 購入)

佐々木久『漢詩の新研究』 (1943. 1. 7 購入)

そして1938年2月1日の日記には、上記森槐南および松崎天胤の書について、「いずれも良書なり。過日購求せし『漢詩作法』は説明不十分なる為め、これまで試作せるものは法にかなはざるもの多し。追て改作の必要がある」という。

なお、上記12点、その内容から見れば、作詩法全般について説くもの6点、詩語に関するもの2点、詩韻2点、平仄2点ということになる。

河上さんが本格的に漢詩を作りはじめたのは、1938 (昭和13) 年、数え年60歳の年初であり、購入日のわかる上記8点の書物のうち5点 (1・2・4・5および『漢詩自在』) まだが同年1月から2月の初めまでに購入されているのは、そのことと符合し、河上さんの熱中ぶりを示す。

1938年1月26日、河上さんは「六十初学詩」と題して七言絶句1首を作った (以下引用する漢詩の読み下し文はすべて筆者による)。

偶会狂瀾咆勃時	偶 <sup>たま</sup> た <sup>ま</sup> 狂瀾咆勃の時に会 <sup>あ</sup> い
艱難險阻備嘗之	艱難險阻 <sup>つばさ</sup> 備 <sup>た</sup> にこれを嘗 <sup>あ</sup> む
如今覓得金丹術	如今 <sup>じよこん</sup> 覓 <sup>もと</sup> め得たり 金丹の術
六十衰翁初学詩	六十の衰翁 初めて詩を学ぶ

河上さんにとって漢詩の創作は文字通り「六十の手習」であり、「六十初めて詩を学ぶ」というのは、言葉のあやではなかった。60歳以前にも、全く作らなかったわけではない。しかしその数はきわめてすくなく、管見によれば、49歳の作1首、55歳獄中での作2首をかぞえるにすぎない。49歳の1首は、櫛田民蔵あて書簡 (1927. 9. 8) に見える (大内兵衛・大島清編『河上肇より櫛田民

蔵への手紙』p. 198, 1974年法政大学出版局)。

去秋亡愛子	去秋	愛子 <sup>うしな</sup> を亡い
今春別慈父	今春	慈父に別る
傷心半似安	傷心	半 <sup>なか</sup> ばは安らかなるに似たり
洛陽一書蠹	洛陽 <sup>しよと</sup>	の一書蠹

書蠹は、本のムシ。第三句「傷心半似安」が、河上肇伝を書く際に一つの重要な示唆を与えるであろうことについては、拙文「愛児の死と詩」(『河上肇一学問と詩』, 1979年新評論)を参照されたい。

次に、55歳獄中の作2首、前者は1933年2月18日付、後者は3月13日付のいずれも夫人あて書簡に見える。前者は獄中書簡集『遠くでかすかに鐘が鳴る』(1957年第一書林)が収めるが、後者の書簡は未公開。なお、前者には詩題なく、後者は「獄中偶成」と題する。

年少夙欣慕松陰	年少	夙 <sup>つと</sup> に松陰を欣慕し
後学馬克斯礼忍	後	馬克斯 <sup>マルクス</sup> 礼忍 <sup>スレーヴン</sup> を学ぶ
読書万卷竟何事	読書万卷	竟 <sup>つい</sup> に何事ぞ
老来徒為獄裏人	老来	徒 <sup>いたづら</sup> に為る 獄裏の人

\*

\*

截然離世間	截然 <sup>はつぜん</sup>	世間を離れ
身似深山僧	身は深山の僧に似たり	
心頭無片雲	心頭	片雲なく
明月滿鉄窓	明月	鉄窓に満つ

以上の3首、いずれも脚韻をふまず、平仄もととのっていない。「漢詩」の作法にかなっていないから、厳密に言えば「漢詩」ではない。ただし、これらの試作品は、かつて別のところでも説いたように、のちの漢詩人河上肇の風貌を十分に予見させる(『河上肇と中国の詩人たち』p. 173, 1979年筑摩書房)。

さて、以上の試作品が示すように、漢詩の作り方、すなわち押韻や平仄の約束事についてほとんど無知であった河上さんは、出獄(1937.6.15)の数か月

後、独学で勉強をはじめ、たちまちにしてその基本をマスターする。さきに引用した1938年1月26日作の「六十初学詩」は、その証拠となろう。創作開始後数作目だが、脚韻（時・之・詩）は正しくふまれ、平仄もととのえてある。しかもその表現は借り物でなく、独自の詩境、独特のアクチュアリティを示す。

「六十初めて詩を学」んだ河上さんは、その後死の前年まで創作をつづけ、ほぼ8年の間に未定稿をも含めれば約160首の漢詩作品をのこした。それらは総体として、「90点以上をさしあげてよろしい」と漢詩の専家に評価されるほどの出来ばえを示したのである（吉川幸次郎「河上肇博士の詩歌」、『河上肇著作集』第11巻付録月報）。

上達の秘密、その背後にあるものとしては、まず第一に河上さん生来の詩才、そして幼少年時代からの漢学の素養、獄中における大量の中国古典詩の読破、といったことがあげられる。とともに、漢詩作法に対する出獄後の集中的な学習をあげなければならない。晩年の河上さんは、強いられた政治的制約によって、新しい友人を作ることはむづかしかっただろう。作詩の師あるいは友を作ることも例外でなく、作品についての的を射た批評をしてくれる師友はいなかった。「ずっと以前に小島祐馬博士より紹介状を貰ひ居りし吉川幸次郎氏を白川の東方文化研究所に訪問し、今後時々漢詩漢文の分からぬ所につき教を受けたき旨を願ひて、間もなく辞去す」（1943年1月20日の日記）ということもあったが、それも残念ながらその時かぎりになった（『河上肇と中国の詩人たち』p. 31-33参照）。漢詩の上達は、ほとんど独学によってもたらされたものであり、上記12点の書物は、そのための貴重な師であり、友であった。

## （二）

以下、旧蔵書の第2の部類に属する中国の詩集、およびその研究書について  
のべよう。

河上さんは若い時代から漢詩に親しみを覚えていた。少年のころ、「蓬門只欲為君開」（蓬門<sup>た</sup>只<sup>た</sup>だ君が<sup>ため</sup>に開かんと欲す）という「七文字が、海浜の山に



沿うた親戚の別荘の門に、板に彫られて掲げられてあるのを見て、いゝ句だなあと思つて居た」。ただしこの「七文字」が中国の詩人陸放翁の句だと知るのは、晩年になってからである（『陸放翁鑑賞』上冊 p. 95, 1949年三一書房）。河上さんは漢学の素養を必須とする時代に生まれ育っただけでなく、母方の祖父河上又三郎は「文芸の趣味を解し、漢詩や和歌を嗜んだ」し（岩波文庫版『自叙伝』第1冊 p. 48）、「須磨の伯父さん（河上謹一）でも、亡くなつた大塚のお父さん（妻秀の父大塚慊三郎）でも、何かと云へば漢詩を作つた」（1936年10月23日付母堂あて獄中書簡）。そうした環境の中で、少年青年時代をすごしたのである。

京大河上文庫には、青年河上の漢詩への愛着を示す貴重な資料がある。それは、『増註唐賢絶句三体詩法』と題する七冊に綴じ分けた和刻本、『素隠抄』ともよばれ、室町時代の僧素隠が唐詩のアンソロジー『三体詩』について講義した記録である。この書物、第3冊目を開けてみると、第1ページに次のごとき印が押してある。

東京巢鴨村 八七六番地	無我苑第三分苑
----------------	---------

無我苑第三分苑といえは、数え年27歳のとき（1905年）、読売新聞連載中の「社会主義評論」を突然擱筆、伊藤証信の宗教団体無我苑に入信して、みずから巢鴨に構えた家屋敷の名である（『自叙伝』第1冊 p. 111）。一切を投げすて「『聖書』と『藤村詩集』以外のすべての書物を売り払つて」（同 p. 62）無我苑にとびこんだはずの河上さんが、上記二点のほかはこの書物も携えていたことになる。これがもともと河上さんの蔵書であったことは、第2冊目の裏表紙に、「明治三十五年八月購入 千山万水楼」と自署してあるのによって知られる。明治35年は1902年、河上さん24歳、無我苑に入る3年前である。河上さんはのちにこの裏表紙にうすい和紙を張り、次のごとき識語を墨書している。

ここに明治三十五年八月購入と記入しあるは、注意するに足る。三十五

年八月は、余が大学を卒業せし翌月に当る。その時かゝる古本を買入れて  
 繙きしものと見えたり。尚ほその後二三年を経、無我苑に身を投ぜし折、  
 余は殆ど一切の蔵書売り払ひ、残しおきしは極めて少数の冊子に止まれ  
 りと記憶し居るが、この書は即ち当時保留しおける物の一に属せりと思は  
 る。何故之を残す気になりしか、今思ひ出づる能はず。最後に、ここに千  
 山万水楼と記入しあるも注意するに足る。此の号、当時既に用ひ居りしも  
 のならむ。

昭和二十年六月十二日河上肇記

晩年の河上さんは、「何故之を残す気になりしか、今思ひ出づる能はず」と  
 いうけれども、それはこの書物への執着、中国の詩への愛着によってではなか  
 ったか。『三体詩』が収める唐詩のいくつかは、のちの河上さんの作詩にかな  
 り濃い影響のあとをのこしている。

さて、中国では、『三体詩』のようなアンソロジーを「総集」とよび、個  
 人の詩集たとえば『陶淵明集』のような書物を「別集」という。河上文庫の中  
 国詩に関する書物も、「総集」と「別集」、そしてそれとは別に「詞」というジ  
 ャンルの詩に関する書物、さいごにそれら三つについての研究書・参考書とい  
 うふうに、4分類することができる。ただし第4類の諸本は、それぞれの分野  
 に組み入れることができるので、以下「総集」「別集」「詞」の各分野について  
 見てみることにする。

まず「総集」の分野では、次のような書物が架蔵されている。時代順にいえ  
 ば、最初にあげられるのは唐詩の総集である。河上さんは詩の黄金時代とよば  
 れる唐代の詩を、次のようなテキストで読んでいた。

1. 唐詩選全釈 平野秀吉 昭和4 (1929) 東洋図書刊行会 (「小菅刑務所図書交付票」貼付)
2. 訳註唐詩選 上・下 漆山又四郎訳註 昭和9 (1934) 岩波文庫 (「小菅刑務所図書交付票」貼付)
3. 唐詩選画本 七言絶句1—5・七言絶句続編1—5 芙蓉山人画・紅翠斎主人  
 画文化11 (1814) 再版・寛政5 (1793) 嵩山房 (1942. 1. 16購)

入)

4. 箋解古文真宝後集・増註三体詩・唐詩選 服部宇之吉校訂 明治43  
(1910) 富山房(漢文大系)
5. 文章軌範鈔・附唐詩選鈔 興文社編集所 大正2(1913) 興文社  
(河上政男蔵本)
6. 増註唐賢絶句三体詩法 1—7 宋・周弼編 元・釈円至註 元・斐庾増  
註 寛永14(1637) 野田庄右衛門
7. 唐詩別裁 上・下 清・沈徳潜選註 刊年未詳 上海商務印書館(国学  
基本叢書簡編) (1942. 3. 23入手)
8. 唐詩評註読本 上・下 王文濡選 汪如廬・金熙注釈 民国14(1925)  
上海文明書局
9. 晚唐百家絶句 館雄次郎編 天保15(1844) 江戸青雲堂
10. 唐詩及唐詩人 小杉放庵 昭和15(1940) 書物展望社 (1941. 5.  
20入手)
11. 分体古詩注解 上・中・下 植村芦洲輯 明治2(1869) 東京須原屋  
茂兵衛 (注, 唐より清に至る楽府体の詩の選集)
12. 瀛奎律髓 上・中・下 元・方回編 文化5(1808) 江戸須原屋茂兵  
衛 (注, 唐宋二代の近体詩の選集)
13. 唐宋千家聯珠詩格 宋・于濟, 蔡正孫編 安政3(1856) 須原屋茂  
兵衛 (注, 唐宋の七言絶句を集めたもの)

日本人はふつう『唐詩選』で唐詩を読む。ところが、明代に編纂されたといわれる『唐詩選』は、その時代の風潮をうけて、かなりかたよった癖のある書物である。詩の選択に偏向がある。たとえば、白楽天や杜牧の詩は一首も収めない。白楽天の詩を好んだ河上さんは、そのことに気づいていただろう。したがって唐詩を『唐詩選』で読むだけでなく、『三体詩』で読み、『唐詩別裁』その他でも読んだ。『唐詩選』だけで中国の詩を知った日本人は、漢詩を豪放で武張ったものとのみ思いがちである。しかし河上さんの視野は広く、その読

詩範囲の広さは、のちの作詩の柔軟さにも反映されている。

河上さんの視野の広さは、唐詩において見られるだけでなく、宋以後の詩にも及ぶ。現代日本の漢詩愛好者（非専門家）で、宋以後の詩にくわしい人はすくない。河上さんが例外の一人であったことは、以下の旧蔵書およびそれらへのすくなからぬ自筆の書きこみが示している。

14. 宋詩鈔 1—4 清・呂留良〔等〕選 民国24 (1935) 上海商務印書館  
(国学基本叢書) (1942. 3. 27入手)
15. 宋詩別裁 清・張景星〔等〕選 民国26 (1937) 上海商務印書館  
(国学基本叢書) (1942. 2. 23購入)
16. 宋詩別裁集 1—4 清・張景星〔等〕選 明治13 (1880) 金港堂
17. 元詩別裁 清・張景星選 民国24 (1935) 上海商務印書館 (国学基本叢書) (1942. 2. 23購入)
18. 十八家詩鈔 吳通生選註 民国24 (1935) 上海商務印書館 (学生国学叢書) (注, 三国魏より宋元に至る十八詩人〈曹植・阮籍より陸游・元好問まで〉の作品を選んだもの, 1942. 8. 5購入)
19. 江湖風月集略註取捨 上・下 小西新兵衛編 明治39 (1906) 京都小川多左衛門 (注, 宋末元初の禅僧の詩選に注を加えたもの)
20. 倭漢朗詠集 山田孝雄校訂 昭和5 (1930) 岩波文庫

個別の詩に対する自筆の書きこみは、河上さんの嗜好を示していて興味深い。その分析はやや専門の領域に及ぶので、今はさしひかえたい。ただ、宋詩のアンソロジー『宋詩鈔』では林和靖・王安石、元詩のアンソロジー『元詩別裁』では元好問への書きこみ・朱点が多いことは、次の「別集」のコレクションの内容と符合する。河上さんには一種「全集主義」のごときモットーがあり、ある詩人の詩が気に入れば、その全作品を読破しようとするのが常であった。

なお、以上のほか、次の旧蔵書7点は、この分野「総集」（そしてまた次の分野「別集」）の参考書としてあげることができる。

21. 歴代詩話 1—16 梁・鍾嶸〔等〕著 清・何文煥〔等〕訂 民国16 (19

- 27) 上海医学書局 (1942. 6. 19入手)
22. 甌北詩話 1—4 清・趙翼 文政11 (1828) 文淵堂
23. 淡窓詩話・約言或問 広瀬淡窓著 長寿吉校訂 昭和15 (1940) 岩波文庫
24. 支那詩史 李維著 真田但馬訳註 昭和18 (1943) 大東出版社  
(1944. 4. 23購入)
25. 支那女流詩講 角田音吉 昭和7 (1932) 立命館出版部 (1943. 12. 10購入)
26. 詩人を通じての支那文化 上村忠治 昭和16 (1941) 第一書房  
(1942. 1. 9購入)
27. 漢詩和詠集 姉崎正治 昭和15 (1940) 明治書院 (1942. 10. 30購入)

これらのうち22の『甌北詩話』は、晩年の河上さんが座右から離さなかった愛読書であり、『自叙伝』にもしばしばその名が見える。そして、この書の導きもあって、河上さんは陸放翁の詩へと深入りしてゆくのである。

### (三)

「別集」すなわち個人の詩文集に属する旧蔵書は、以下のごとくである。詩人の生年順に紹介することとしよう。

まず、陶淵明 (365-427)。河上さんが淵明の詩に親しむのは、獄中においてである。1933 (昭和8) 年1月検挙拘置された河上さんは、8月、懲役5年の判決をうけ、9月、控訴をとり下げて下獄する。その11月の末、小島祐馬博士から借用した本田成之著『陶淵明集講義』が獄中に届けられる経緯については、『自叙伝』(第3冊 p. 243) にくわしい。また、翌34 (昭和9) 年正月、獄中の書初めに淵明の詩「園田の居に帰る」を書いたこと、および淵明文学の本質についての的を射た論評、それらが同じく『自叙伝』(第3冊 p. 264 以下) に見える(『河上肇と中国の詩人たち』p. 44 以下参照)。

獄中の河上さんは、さきの本田成之本のほか続国訳漢文大成本（王右丞〔王維〕集との合本）によっても淵明の詩を読んでいるはずだが（河上秀『留守日記』p.159）、両本とも河上文庫には見えない。ただし本田本は、小島博士旧蔵のそれだけでなく、新たに購入されたと思われる1本をそなえる。現在河上文庫が架蔵する淵明関係の書物は、以下のごとくである。

1. 陶淵明詩 傅東華選註 民国23 (1934) 上海商務印書館（学生国学叢書）（1942. 8. 5購入）
2. 陶淵明集1—4 近藤元粹訂 明治27 (1894) 青木嵩山堂
3. 陶淵明集講義 本田成之 大正10 (1921) 隆文館
4. 中国八大詩人 胡懷琛編 民国24 (1935) 上海商務印書館（国学小叢書）（注、屈原・陶淵明・李白・杜甫・白居易・蘇軾・陸游・王士禛について論じたもの、1942. 4. 15購入）
5. 歌詠自然之兩大詩豪 郭伯恭 民国25 (1936) 上海商務印書館（国学小叢書）（注、陶淵明と王維について論じたもの、1942. 4. 15購入）

次に、唐代の詩人に関する書物は、以下のごとくである。

6. 王子安集 王勃 民国29 (1940) 商務印書館（国学基本叢書）（1942. 4. 6購入）
7. 王維与孟浩然 楊蔭深 民国25 (1936) 上海商務印書館（国学小叢書）（1942. 4. 15購入）
8. 訳註李太白詩選上・下 李白 漆山又四郎訳註 昭和7, 9 (1932, 1934) 岩波文庫（「小菅刑務所図書交付票」貼付）
9. 詳解李太白詩集 大槻徹心 昭和17 (1942) 京文社（1943. 4. 3購入）
10. 李詩講義 森槐南 大正2 (1913) 文会堂
11. 岑嘉州詩集 岑参 民国27 (1938) 商務印書館（国学基本叢書）
12. 訳註杜詩1—4 杜甫 漆山又四郎訳註 昭和8—9 (1933—1934) 岩波

## 文庫 「小菅刑務所図書交付票」貼付

13. 杜詩講義 上・中・下 森槐南 明治45 (1912) 文会堂
14. 憂愁の詩人杜甫 上村忠治 昭和14 (1939) 春秋社
15. 孟東野詩集 孟郊 民国27 (1938) 商務印書館 (国学基本叢書)  
(1942. 4. 6購入)
16. 孟郊詩 夏敬觀選註 民国29 (1940) 商務印書館 (学生国学叢書)  
(1942. 8. 5購入)
17. 韓昌黎集 上・下 韓愈 民国27 (1938) 商務印書館 (国学基本叢書  
簡編)
18. 張籍詩注 陳延傑注 民国27 (1938) 商務印書館 (国学小叢書)  
(1942. 8. 5購入)
19. 白樂天詩集 1・2 白居易 近藤元粹評訂 明治31 (1898) 青木嵩山  
堂
20. 白樂天詩集 1—3 佐久節訳解 昭和 3—4 (1928—1929) 国民文庫刊行  
会 (続国訳漢文大成)
21. 長江集・附閨仙詩 賈島 民国29 (1940) 上海商務印書館 (国学基  
本叢書)
22. 賈島詩註 陳延傑註 民国26 (1937) 商務印書館 (国学小叢書)  
(1942. 4. 15入手)
23. 訳註李長吉詩集 李賀 漆山又四郎訳註 昭和 8 (1933) 東明書院  
(「差入物件受付票」貼付)
24. 李義山詩講義 上・中 森槐南 大正 3—4 (1914—1915) 文会堂
25. 温飛卿詩集箋注 1—4 温庭筠 明・曾益原注 清・顧予咸補注 宣統  
2 (1910) 上海同学扶輪社用秀野草堂本景印

以上の諸本、詩人別にその点数をあげれば、李白 3, 杜甫 3, 孟郊 2, 白居易  
2, 賈島 2, そして王勃・王維・孟浩然・岑参・韓愈・張籍・李賀・李商隱(李  
義山)・温庭筠各 1 ということになる。

これらの版本を見れば、河上さんはごく粗末な、しかしその大部分は中国で出版された書物で詩を読んでいたことがわかる。一般の日本人の読詩範囲をこえる河上さんの関心が、そうさせたのであろう。王勃・岑参・孟郊・張籍・賈島・温庭筠などは、当時の日本の出版物ではなかなか全容を知りたい詩人たちであった。

唐代の詩人のうち、河上さんが最も好んだのは、王維(699-761)と白樂天(772-846)である。王維に関する書物は、上記のうち7の『王維与孟浩然』だけだが、別にさきの5『歌詠自然之兩大詩豪』も王維論をふくむ。また前述のごとく、河上さんは獄中において王維の詩の全集(統国訳漢文大成『陶淵明集・王右丞集』、陶集369ページ・王集629ページ)を熱心に読んでいた。そして夫人あて獄中書簡(1934. 11. 20)では、「最近差入れて貰った王右丞集は非常に結構です。『悠然たる遠山の暮、独り白雲に向うて帰る』(注、『輞川に帰りの作』)と云ったやうな佳句に出会つて、飽くことを知らず口吟しながら、寝に就くと、やがて詩を夢に見ます。不愉快な夢を見るのと違つて実に気持が善いです。」という。また友人の画家津田青楓あての獄中書簡(1935. 3. 2)でも、王維の詩のよさを語り、是非その詩集を読むように勧めている。

白樂天と河上さんとのかかわりは深く、そのエピソードのいくつかはかつて紹介したことがある(『河上肇と中国の詩人たち』p. 120 以下)。

李白(701-762)と杜甫(712-770)、この二大詩人の作品が獄中の読書対象であったことは、上記8と12の岩波文庫本に貼付された「小菅刑務所図書交付票」によって知られる。ところが河上さんは、李杜の詩についてほとんど語らない。李杜を語った未見の文章があるいはあるのかも知れない。しかし、陶淵明や白樂天についてはかなり饒舌に語る獄中書簡、獄中日記、そのいずれにも李杜はほとんど登場しない。無関心であったのではないだろう。李白・杜甫の岩波文庫本には朱点が施され、ときに書きこみもある。そしてたとえば、次女芳子さんあて獄中書簡(1935. 8. 18)では、「……杜甫を繙いて、『病を江天に抱く白首の郎、空山楼閣春光暮る』(注、『河北諸道の節度入朝せるを承聞し



歎喜して口号せる絶句十二首』の第七首)とか、『万里悲秋常に客と作り、百年多病独り台に登る』(注、『登高』)とか云ふやうな句に出逢ふと、実にいいなあと思ひます。……」などという。だが、李杜を正面から論じた文章が見当たらないのは、まことに残念である。

なお、「鬼才」とよばれた異色の青年詩人李賀(791-817)、かつて魯迅や毛沢東が愛読したという李賀の詩(李長吉詩集)が、河上旧蔵書の中にあり、若干の書きこみがあるのも興味深い。

次に、宋代の詩人について見てみよう。

26. 林和靖詩集 林逋 民国27(1938) 商務印書館(国学基本叢書)  
(1942. 3. 23入手)
27. 王安石詩 夏敬觀選註 民国29(1940) 商務印書館(学生国学叢書)
28. 蘇東坡詩集 1-5 蘇軾 岩垂憲徳〔等〕注解 昭和3-6(1928-1931)  
国民文庫刊行会(統国訳漢文大成)
29. 東坡先生詩鈔 1-4 清・周之麟・柴升選 朝川鼎・松井元輔校 文化  
3(1806) 京都勝村治右衛門
30. 黄山谷詩集 黃庭堅 民国25(1936) 上海世界書局 (1942. 4. 6購入)
31. 陸放翁全集 1-48 陸游 汲古閣刊本 (1941. 9. 12入手)
32. 陸放翁集 2・3・4 民国22(1933) 上海商務印書館(国学基本叢書)  
(1941. 4. 23入手)
33. 箋註劍南詩鈔 1-6 陸游 清・楊大鶴選 清・雷瑁註 民国14(1925)  
上海掃葉山房
34. 陸放翁詩鈔注 陳延傑注 民国27(1938) 商務印書館(国学小叢書)  
(1942. 3. 21入手)
35. 放翁先生詩鈔 清・周之麟・柴升選 人寰詩伝〔等〕校 享和1(18  
01) 青藜閣
36. 石湖居士詩集 范成大 民国27(1938) 商務印書館(国学基本叢書)

(1942.9.1購入)

37. 白石道人詩集 姜夔 民国26 (1937) 上海商務印書館 (国学基本叢書) (1942.3.23入手)

以上12点、詩人別にいえば、陸游5、蘇軾2、そして林逋・王安石・黃庭堅・范成大・姜夔各1。

陸游 (号は放翁、1125-1209) 関係の書物がきわだって多いのは、その傾倒ぶりを示す証拠である。河上さんには『陸放翁鑑賞』と題する上下2冊900ページに近い著作 (1949年三一書房) まであり、その深いかかわりについては、筆者もすでにいくつかの文章で論じたことがある (『河上肇と中国の詩人たち』 p. 3, p. 20, p. 77, p. 82, 「河上肇詠放翁詩」〈『近代』1977年5月号〉, 「矛盾と実事——河上肇と陸放翁」〈『文学』1978年7月号〉)。

26の『林和靖詩集』については、1942年3月23日の日記にいう。

……林和靖詩集を繙くに、甚だ良本なり。僅か二十五銭を投じて斯かる良本を入手し得らること、実に望外の幸福と謂ふべし。喜び甚だし。

27の『王安石詩』、その奥付前ページには河上さん自作の漢詩1首 (1942年4月1日作) がしるされている。読み下し文をそえて示せば、

投老潛窮巷	老に投じて窮巷に <sup>ひそ</sup> み
姓名世莫知	姓名 世の知るなし
穿櫺春夜月	<sup>まど</sup> 櫺を <sup>うが</sup> つ 春夜の月
誰対半山詩	誰か半山の詩に對す

「櫺」は、れんじまど。「半山」は、王安石隱棲の地にちなむ号。いちいちの語釈は、小著『河上肇詩注』 (1977年岩波新書 p. 122) を見られたい。革新政治家王安石 (1021-1086) について、河上さんの評語を聞きたいが、上記の暗示的な詩1首のほか、安石に言及した文章は今のところ見当らない。

王安石の政敵であった蘇軾 (東坡は号、1036-1101) の詩も、河上さんの愛読するところである。それだけでなく、東坡の性格に自分との類似点を見出し、『自叙伝』や日記の中でしばしばそのことにふれる (『河上肇と中国の詩人た

ち』p. 129 以下参照)。

次に、元・明・清の詩人となると、さすがにすくなく、その詩集は7点しかない。

38. 元好問詩 金・元好問 夏敬觀選註 民国29 (1940) 商務印書館  
(学生国学叢書) (1941. 11購入)
39. 高青邱詩集初編 (絶句之部) 1—3 明・高啓 清・金檀注 梁川星巖校  
安政3 (1856) 文政堂 (1942. 6. 16入手)
40. 高青邱詩集二編 (律詩之部) 1—5 同上 安政3 (1856) 文政堂  
(1942. 6. 16入手)
41. 高青邱詩醇 1—3 斎藤拙堂編 嘉永3 (1850) 藤堂家蔵版 (1942.  
6. 2購入)
42. 王陽明先生詩鈔 上・下 明・王守仁 塚原苔園評点 明治13 (1880)  
長坂熊一郎
43. 呉梅村詩集箋注 清・呉偉業 吳翌鳳注 民国25 (1936) 上海世界  
書局 (1942. 7. 1入手)
44. 甌北詩鈔 1—8 清・趙翼 同治11 (1872) 重刊本

以上7点のうち3点までが明の高青邱 (名は啓, 1336-1374) の詩集であり、河上さんの関心の深さを示している。晩年の日記 (1942. 7. 4) にも、「この頃……しきりに高青邱<sup>しんし</sup>に親む」とあり、また同年の別の条 (1942. 10. 13) に土岐善麿『高青邱』 (同年刊行) の購書記録がある。そして翌1943 (昭和18) 年12月12日には、次のような詩を作っている。

未曾有なる此の戦乱の真只中に／俺<sup>わし</sup>は一日中炬燵<sup>こたつ</sup>にもぐりこんで／ドストエフスキーの思ひ出を聞いたり／ゴッホの手紙を読んだり／陸放翁、溫飛卿、高青邱、趙翼などの詩を見せて貰ったり……

さらに、次の短歌1首は1945 (昭和20) 年1月17日の作である。

枕辺に青邱集と残燈と人はねむりて夜は更けゆく

これら一連の記録や作品は、青邱詩集が河上さん晩年の身辺から離れなかつ

たことを語っている。

「別集」の詩人たちやその詩集と河上さんとのかわりについては、なお説くべきことがすくなくないが、別の機会にゆずって次にすすみたい。

#### (四)

漢詩人河上肇の旧蔵書の中で異彩を放つのは、「詞」に関する文献である。詞は一名長短句ともよばれるごとく、長短不揃いな句構成をもつ韻文であり、唐代に発生して宋代に盛行した。現代では毛沢東がその巧手のひとりとして知られる。

日本人にはあまりなじみのないこのジャンルの文学について、河上さんはよく研究していただけでなく、みずからも創作を試みている。京都大学での同僚河田嗣郎博士の死を悼んだ次の作品は、その1例である。題して「氷谷博士を弔う」といい、「憶江南」という古い曲調にあわせて作った詞。

同遊地	ともに遊びし地
寂寞憶君時	寂寞 君を憶うの時
孤影竜鐘空曳杖	孤影竜鐘として空しく杖を曳けば
百花落尽一溪遺	百花落ち尽くして一溪遺り
水鳴咽風悲	水鳴咽して風悲しめり

河上文庫の「詞」関係の書物は、以下の8点である。

1. 唐五代詞選 成肇馨選輯 民国25 (1936) 上海商務印書館 (国学基本叢書簡編) (1942. 6. 5購入)
2. 唐五代四大家詞 丁寿田・丁亦飛選註 民国29 (1940) 商務印書館 (学生国学叢書) (1942. 4. 15購入)
3. 南唐二主全集 管效先編 民国24 (1935) 上海商務印書館 (1942. 7. 1購入)
4. 李後主 楊蔭深 民国24 (1935) 上海商務印書館 (百科小叢書) (1942. 6. 5購入)

5. 歴代閨秀詞選集評 徐珂選輯 民国22 (1933) 上海商務印書館  
(注、宋より清に至る女流詞人の選集、1942. 8. 5購入)
6. 宋詞通論 薛礪若 民国26 (1937) 上海開明書店 (1942. 8. 5入手)
7. 填詞図譜 上・下 田能村竹田 文化3 (1806) 京都堺屋伊兵衛  
(1942. 6. 2購入)
8. 宋代の詞 中田勇次郎 昭和15 (1940) 京都弘文堂書房

これらの旧蔵書およびそれへの書きこみ等によって、河上さんがまず詞の文学の精粋を知り、創作方法（詞の法則）についても本格的に勉強していたことがわかる。

2の『唐五代四大家詞』は、唐とそれにつづく五代の詞の名手温庭筠・韋莊・馮延巳・李後主（李煜）の作品約140首に評釈を加えたもの、3の『南唐二主全集』は、詞文学の代表的作者といわれる五代南唐の君主李璟・李煜の作品を集めたもの、6と8は宋代の詞の概説、7の『填詞図譜』は詞の作り方を挿図をまじえて説明した書物、「填詞」は詞の別名である。詞には題名によってそれぞれきまった曲調があり、その曲に従って各句の字数や平仄のきまりがある。これを図式化した「図譜」に合わせ、詞を填めていって作りあげるの「填詞」ともいう。田能村竹田の『填詞図譜』を購入したとき、河上さんは友人の画家原鼎あての手紙（1942. 6. 13）で次のようにいっている。

……竹田の作った填詞図譜といふ木版本を買って来ました。竹田といふ画家はなかなか風流人だつたと見えて、言はば填詞の作り方を入門書的に書いて二冊の本に作つてゐるのです。平仄や押韻を図で説明してあつて、親切な本です。私はそれにそそのかされて、生れて初めて楽府詞（注、詞の別称）二首を作りました。……

さて、詞に関する旧蔵書のうち、4の『李後主』には、見返しの裏に次のような河上さん自筆の識語がしるされている。

余数日来、李後主の詞十余首の評釈を試み、興を感じること少からず。今日散歩の序を以て偶々臨川書店に立ち寄りしが、計らずも本書に邂逅す。

価僅かに三十五錢、然かも之によつて得るところの樂、實に少小にあらず。

窃に読書人の晩年の多幸なるを喜ぶ 昭和十七年六月五日 閉戸閑人

河上さんは詞を読み詞を作り、さらに詞の注釈を書いた。上記識語に「李後主の詞十余首の評釈を試み」というのがそれである。そしてその草稿は、「詞の鑑賞」と題する400字詰原稿用紙160枚の評釈（未公刊）の一部として現存する（『河上肇遺品展図録』p. 20 参照、1973年河上肇記念会・京都府立総合資料館）。「詞の鑑賞」の原稿は3部に分かれ、その一「唐五代詞選 十七首」、その二「唐五代四大名家詞鑑賞 六十一首」、その三「宋詞選 第一集十三首」。「宋詞選 第一集」というのだから、さらに第二集以下が書きつがれる予定だったのだろう。「詞の鑑賞」における河上さんの解釈と鑑賞は、素人の域をこえた水準を示している。先日、詞の専門家である友人に草稿のコピーを見てもらったが、その友人も一読感嘆したという。

河上さんの詞への開眼は、たぶん(一)で紹介した森槐南『作詩法講話』（第四章「詩・詞の別」、購入日は1938. 2. 1）によるだろう。しかし詞に関する書物を集中的に購入するのは、上記1～7が示すように1942（昭和17）年の4月から8月にかけてである。上記「詞の鑑賞」も同年5月から9月にかけて執筆された。なおそのころの日記には、上記8点のほか、次の書物の購求記録が見える。『唐宋名家詞選』（1942. 9. 2購入）。この時期ににわかに関心を示しはじめる理由については、未公刊の書簡等によってもうすこししらべてみる必要があらう。

ところで上記6の『宋詞通論』は現代中国語で書かれた宋詞の概説書だが、河上さんはよくこれを読みこなし、一部分を翻訳して「詞の鑑賞」中に引用している。河上さんの研究心、好奇心の旺盛さと、言葉に対する鋭い感覚には、感服せざるをえない。

詞の文学はその発生のときから、繊細さと艶っぽさをそなえた特異な芸術である。河上さんがこれに強い関心を抱いたのはなぜか、それは人間河上を知る上で興味ある研究対象（テーマ）となるだろう。

## (五)

以上が漢詩の作者・読者・研究家としての河上肇の旧蔵書である。河上文庫はこれらのほか、漢詩研究の参考書として以下の書物を架蔵する。

1. 歴代名人年譜 清・呉栄光 民国23 (1934) 上海商務印書館 (国学基本叢書) (1942. 8. 5購入)
2. 歴代地理志韻編今釈 上・中・下 清・李兆洛 民国26 (1937) 上海商務印書館 (国学基本叢書) (1942. 3. 23入手)
3. 中国分省図 中華教育文化基金董事会編訳委員会 民国27 (1938) 長沙商務印書館
4. 入蜀記 朱僕 民国28 (1939) 商務印書館 (注、陸游の「入蜀記」ではなく近代の旅行記, 1942. 8. 5入手)
5. 支那歴代地名要覧 (読史方輿紀要索引) 青山定雄編 昭和14 (1939) 東方文化学院 (1942. 4. 15購入)
6. 支那地名集成 外務省情報部 昭和15 (1940) 日本外事協会 (1942. 5. 16入手)

河上さんは獄中においても、漢詩を読むために『世界地理風俗大系支那篇』の差入れを求めており (『留守日記』 p. 164-165)、詩を読むために詳細な時代別地理書を座右におくというのは、「実事」を重ねた河上さんらしい読書法である。辞書も日本の漢和辞典にはよらず、もっぱら中国の『辞源』を使っていた。

なお、河上文庫には『良寛詩集』や『(梁川) 星巖集』、また同時代人の田島錦治『赤城詩稿』などかなりの数にのぼる日本人の漢詩集を架蔵するが、その詳細は省く。また『唐宋伝奇集』『支那短篇小説萃選』といった中国の散文学に関する書物や『論語』など経学の書物も若干あるが、漢詩とは直接関係しないので、これも省略する。

漢詩人河上肇の旧蔵書は、非専門家にしては珍しく趣味の域をこえたコレク

ションであり、これらを読破したその成果が、すぐれた漢詩作品の創作となり、また『陸放翁鑑賞』その他の独創的な評釈として結実したのであろう。

はじめに紹介した森槐南『作詩法講話』（1938.2.1購入）の開巻第1ページに、次のような河上さんの識語がしるされている。

問題を弁証法的に、発展的に見てゐる。それが此書の長所である。

1937年、出獄に際して、河上さんは一切の政治活動から身をひくことを宣言した。しかしマルクス主義の正しさについては、毫も疑いをはさむことがなかった。出獄後の河上さんは、詩に対する豊かで鋭い感受性ととも、おのずから血肉となった唯物史観、唯物弁証法の観点をもって、上記の蔵書群に親しみ、その観点は、これまたおのずから『陸放翁鑑賞』その他晩年の著述に反映されている。牢獄と戦争が晩年の健康をむしばまなかったら、中国の詩や詩人についての水準高く独創的な著作が、さらにいくつか生まれていたであろう。漢詩人河上肇の旧蔵書と、それらへの丹念な書きこみは、そのことを十分に「予見」させる。まことに残念というほかはない。(1979.9.4)